

F-SOAIPとは、多職種協働によるミクロ・メゾ・マクロレベルの実践過程において、生活モデルの視点から、当事者ニーズや観察、支援の根拠、働きかけと当事者の反応等を「F（タイトル）」「S（利用者等の言葉）」「O（観察・多職種情報等）」「A（考えたこと）」「I（対応したこと）」「P（予定）」の項目で可視化し、PDCAサイクルに多面的効果を生むリフレクティブな経過記録の方法。

地域共生社会の実現に向け、全国の自治体には重層的支援体制整備事業など既存の枠を超えた連携が求められているなか、大阪府大東市では記録の統一性・汎用性の重要性に気づき、市社会福祉協議会がF-SOAIP研修を実施した。その効果に端を発して他の事業にもF-SOAIPを取り入れる動きが急速に広がっている。

F-SOAIP を活用した包括的支援体制の推進 ～記録法の統一による多機関・多職種・多事業の連携～

社会福祉法人大東市社会福祉協議会 ソーシャルワーカー 村尾 空見子

導入：地域と私の役割

大東市は大阪府の東部に位置し、生駒山地の西麓に広がる自然豊かなまちである。私は令和5年度から、重層的支援体制整備事業（移行準備）の相談支援包括化推進員として活動してきた。年間120回を超える多機関会議への参加、カンファレンスへの同席、相談者宅への訪問などを重ねるなかで、現場全体に共通するある課題が浮かび上がってきた。

課題認識：記録のばらつきと連携の壁

地域共生社会の実現には、多機関・多職種の協働による包括的支援体制の横展開が不可欠である。その中心的役割を担うソーシャルワーカーには、多様なケースへの対応力とともに「情報共有の技術」が求められ、その情報の根幹となるのがワーカーの『支援経過記録』であると考えた。

しかし、従来の支援経過記録は記録者ごとの書き方や内容にばらつきがあり、他者の記録を読んでも状況把握に時間がかかるケースが多かった。記録

は支援の要であるにもかかわらず、形式や視点が統一されていないことで、連携の妨げになっていたのである。

取り組み：F-SOAIP研修の実施

解決策を模索する中で出会ったのが『F-SOAIP』だった。主に医療現場で活用されるSOAPに綴りが似ていたことや、「汎用性が高い」というキーワードに魅力を感じた。早速テキストを購入し、自身の叙述形式の記録をF-SOAIPに変換する訓練を重ねる中で「これならいけそう」という手応えがあり、光が射した。

そこで研修を企画し、テーマを

- ①支援者の専門性向上
- ②機関の機能向上
- ③利用者の生活の質向上

の3つに設定。この1年間に関わってきた方々に本研修への参加を呼びかけたところ、行政はじめ、高齢・障害・こども・困窮分野の相談支援機関、ひきこもり支援機関、コミュニティソーシャルワーカー（CSW）、大東市地域貢献委員会に加入している社会福祉法人・社会医療法人、大阪府社協、他市からも反

響があり、2日間でのべ190名の参加をいただいた。

研修に先立ち実施したアンケートでは「記録が長くなりがち」「要点整理が苦手」「統一感がなく他者の記録が読みにくい」という声が多かったが、研修後は「関係者間で統一した記録ツールにしたい」「職場で研修を行い、まずはFだけでも全員が書けるようにしたい」など、組織的な取り組みへの意欲が高まった。また、他者の記録から新たな視点や知識を得るなど、記録を「学びの機会」として捉える意識が芽生えた。

2回シリーズの研修修了時のリフレクション結果を見ると、より掘り下げられていることがわかる（表）。

効果と今後：共通言語としてのF-SOAIP

F-SOAIPで記録された経過は、支援の流れが可視化されるため、異なる機関の職員でも一目で状況を把握できる。これにより、個別のケースを全員で共有し、同じ目標に向かって協働する体制が強化される。

現在、大東市社会福祉協議会の多様な事業でF-SOAIPの記録導入を